

論 文 要 約

学位論文題目 感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情が心理的 well-being に与える影響とその
メカニズムの検討

氏名 鷲巣奈保子

本論文の目的は, 他者の向社会的行動の受け手に生じる感情である感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情が心理的 well-being(Psychological Well-Being, 以下 PWB)に与える影響とそのメカニズムを明らかにすることであった。

序論では, 感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情に関わる諸領域の先行研究をレビューした後, 先行研究の課題と本論文の目的を述べた。

本論は第 I 部と第 II 部から成り, 第 I 部(研究 1 から 4)では, 感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情がそれぞれ対人的志向性を介して PWB を促進するというモデル(対人的志向性の媒介モデル)を検討した。第 II 部(予備調査および研究 5)では, 「すまない」感情の程度や頻度が高まり苦しくなったとき, 「すまない」感情がポジティブリフレーミングによって感謝に転換され, 感謝を通じて PWB が導かれるというモデルを検討した。

第 I 部 対人的志向性の媒介モデルの検討

感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情をそれぞれ異なる概念として同時に扱い, 対人的志向性の媒介モデルを検討するためには, その前提としてそれぞれの共通点および相違点を含む具体的な性質を明らかにし, 整理する必要がある。そこで, 研究 1 では, 感謝, 心理的負債感, 「すまない」感情それぞれの性質を, 他の一般的感情および援助者の返報期待との関連という観点から検討した。その結果, 感謝は他の一般的なポジティブ感情とのみ正の相関をもつこと, 「すまない」感情は感謝と同様にポジティブ感情と正の相関をもつが, 罪の意識というネガティブ感情とも正の相関をもつこと, 心理的負債感はネガティブ感情とのみ正の相関をもつことが示された。また, 援助者の返報期待が大きくなると被援助者が抱く感謝と「すまない」感情は減少するが, 心理的負債感の大きさは援助者の返報期待のレベルが変化しても変わらないことが示された。

研究 2 では, パイロットスタディとして既存の尺度を用いて対人的志向性の媒介モデルを検討した。その結果, 心理的負債感が対人的志向性を介して PWB を促進するという間接効果が示された。また, 心理的負債感の下位因子として, 負債感(借りによる心理的負担)と負債感(返報義務感)の 2 つが抽出された。さらに, 感謝から PWB への正の直接効果が有意であった。

研究 3 では, 研究 2 に含まれなかった「すまない」感情を加え, 社会的望ましさの影響を統制したうえで対人的志向性の媒介モデルを検討した。その結果, 負債感(借りによる心理的負担)および負債感(返報義務感)が対人的志向性を介して PWB を促進する間接効果が示された。また, 感謝

から PWB への正の直接効果が有意であり、感謝と PWB の関連の頑健性が示された。

研究 4 では、負債感 (借りによる心理的負担) および負債感 (返報義務感) と対人的志向性との関連を、互恵的対人関係意識の下位概念である互恵意識が調整するという仮説を検討した。その結果、互恵意識が平均以上のとき、負債感 (返報義務感) と対人的志向性が正の関連をもつことが示された。

このように、第 I 部では、互恵意識が高い場合、負債感 (返報義務感) を感じやすいほど他者に積極的に関わっていき、他者との良好な関係を通じて PWB が促進されるという一連のプロセスが存在する可能性が示唆された。

第 II 部 すまない感情から感謝への転換

内観療法のプロセスにおいて、「すまない」感情が認知的再解釈を通じて感謝に転換され、最終的に well-being の幅広い側面が促進されるというプロセスが想定されていることに注目し、日常生活のなかで「すまない」感情が高まり苦しくなったとき、ポジティブリフレーミングを通じて「すまない」感情が感謝に転換されるという仮説を検討した。まず、予備調査を行い、「すまない」感情から感謝への転換を生じさせる、すなわち、「すまない」感情を低減し感謝を増大させるポジティブリフレーミングの内容の明確化を行った。その結果、「支えられている感覚」および「相手の意図に対する肯定的意味付け」という内容が見出された。

研究 5 では、予備調査の結果を参考にポジティブリフレーミング尺度を作成し、「すまない」感情および感謝との関連を検討した。その結果、ポジティブリフレーミングは「すまない」感情とは負の、感謝とは正の相関をもつことが示され、この結果に対する 1 つの解釈として、日常生活においてポジティブリフレーミングによるすまない感情から感謝への転換が生じている可能性が示唆された。

最後に、結論では、研究 1 から 5 までの知見をまとめ、さらに考察を加えた。そして、得られた知見からの示唆、本論文の意義、本論文における研究の限界と今後の課題について述べた。